

Dākinīvajrapaṇjara 文献の灌頂について

—第四灌頂を巡って—

横 山 裕 明

0. はじめに

Dākinīvajrapaṇjara (デルゲ版東北目録 No.419, 北京版大谷目録 No.11, 以下 VP) における第四灌頂の有無を明確にすることは非常に困難である。それは大碩学たる註釈者たちによっても結論を異にする大きな問題であり、ましてや現代に残された少ない資料の字句を追っただけでは確実な結論など得られるはずもない。第四灌頂とは古来、謎に包まれた存在なのである。後述するように、VP の註釈書の中に第四灌頂の語は見られるが、VP 自体が第四灌頂を想定して作られたかどうかは分けて考えるべきである。これを混同してしまえば、結果として VP と他タントラとの先後関係を見誤ることにもつながる。

したがって、本稿の目的は、単に VP における第四灌頂の有無および VP と他タントラとの先後関係を明確にすることではない。あくまでも VP 文献の中に見られる灌頂をまとめ、その上で註釈書の中に見られる第四灌頂という言葉の巡って、他タントラとの比較を試みた結果から見えてくるいくつかの可能性を示すことである。

1. VP の概要と先行研究における問題

タントラ研究は近年飛躍的に進んでいるが、膨大に残されたタントラ文献の中には未だ研究の不十分なものが多く残されている。この VP も研究が十分になされておらず、未解明なタントラの1つといえる。VP は一般的に広く知られているタントラではないが、後期密教の代表的なタントラの1つである *Hevajratantra* (以下 HV) との関係が深いとされている。

『プトゥン仏教史』においては、HV に関係するタントラとして *Samputodbhavatantra*¹ (以下 SU) と共に列挙されている極めて重要な

タントラである。しかし、そのような重要なタントラであるにも関わらず、VPを中心とした研究はほとんど見受けられない。そこには様々な理由が考えられるが、1つにはVPにSkt.原典が確認できないことが挙げられる。したがって、研究は翻訳に頼らざるを得ないが、漢訳は存在せず、一方Tib.は非常に難解である。また、VPは15章から構成されており、中心となる尊格は一定していない。タントラを含めた多くの密教經典類に見られるように、各章は強い独立性を有しているといえる。

そこで、Skt.によって書かれたVPの註釈書はVPを読み解く上で特に重要な鍵となる。現在、Skt.で完本として残されている註釈書は*Ḍākinīvajrapaṇjaratīpattī*²（以下VPT）のみである。また、全体のSkt.は残されていないが³、VP全章に渡る詳細な註釈がされているという点でMahāmatideva著*Ḍākinīvajrapaṇjarapaṇjikā*（デルゲ版No.1196、北京版No.2326。以下VPP）も重要な文献である。他にもいくつかの文献⁴がVPの註釈書として知られており、並行して読み進めているが、本稿ではVPの灌頂を語る上で必要となるVPTとVPPという2つの註釈書を中心に扱っていく。

なお、前述した通り、このVPはHVに関係するタントラとされており、特にHVの釈タントラとして知られているが、ここで言うHVは現在広く知られているものではない。現在、HVとして広く知られているものは『二儀軌』（*Dvikalpa*）と呼ばれるHVの略本であり、VPが示すHVはVP第1章に登場する『五十万頌のヘーヴァジュラ』という広本である。ただし、広本のHVの存在については真偽が不明である。なお、特に『二儀軌』を所依の聖典とするチベット仏教サキャ派は、VPを重視したようである⁵。いずれにせよ、VPと『二儀軌』はHVから抽出されたと伝えられ、兄弟関係のタントラといえる。

ところで、先行研究において、VPと他タントラとの先後関係については第四灌頂（*Caturthābhiṣeka*）の有無が1つの重要な判断基準とされてきた。そもそも、第四灌頂とは後期密教系灌頂の1つであり、瓶（または阿闍梨）灌頂・秘密灌頂・般若〔智〕灌頂と続いた直後の第四番目に説かれる灌頂であるから第四灌頂といわれる⁶。タントラや註釈ごとに内容差はあるが、主として般若智灌頂の内実を説き、言葉によって「密教による密教の論理の自己否定」⁷がなされるもの、それが第四灌頂とされている。

しかし、VP には灌頂の内容については詳細が説かれていないため、般若〔智〕灌頂の後における第四灌頂という語の有無が焦点となる。

VP の成立・発展に関する主な先行研究として、まず島田茂樹氏は第四灌頂がタントラ本文にも諸註釈にも説かれていないとし、*Samāyogaḍākinījālasaṃvara*（以下 SS）のヘールカ族曼荼羅が VP の *Pañcaḍāka* 曼荼羅を経て『二儀軌』の九尊曼荼羅に発展したことを主張している⁸。

一方、田中公明氏は、SS のヘールカ族曼荼羅が『二儀軌』の九尊曼荼羅を経た後、再び、五部曼荼羅に拡張させて VP の *Pañcaḍāka* 曼荼羅が成立したということを主張している⁹。その根拠として、VP 第十五章で後期密教系の四灌頂が含まれた十種灌頂が説かれていること¹⁰、*Pañcaḍāka* 曼荼羅の眷属が SS と一致しないことが非合理的であること等を挙げている。

以上のように、VP の第四灌頂に関する両氏の主張は真つ向から対立している。そこで、次節では具体的な VP 文献の灌頂に関する記述を示したい。

2. VP 文献の灌頂

まず、VP の灌頂に関する偈には以下がある。

VP 第 7 章より（デルゲ版45a1-2, 北京版278b7）

bum pa'i dbang ni dang po ste || gnyis pa la ni gsang ba'i
dbang ||
gsum pa shes rab ye shes te || ji ltar lus ni de bzhin gshegs ||

上記の VP 第 7 章の偈は後期密教系灌頂を説くものである。1 番目に瓶灌頂、2 番目に秘密灌頂、3 番目に般若智灌頂と順番に説かれるが、第四灌頂の語はない。

VP 第 15 章より¹¹（デルゲ版64b1-2, 北京版300a4-6）

chu yi dbang ni dang po ste || cod pan dbang la gnyis pa'o ||
rdo rje'i dbang gis gsum pa ste || rang gi bdag po bzhi pa
nyid ||

ming gis dbang bskur lnga pa ste || drug pa rdzogs pa'i sangs
 rgyas nyid ||
 bdun pa bum pa'i dbang gis te || gsang ba'i dbang gis brgyad
 pa'o ||
 shes rab dbang las dgu pa ste || de nyid rdo rje'i sbyor ba yis ||
 kun gyi de nyid brtul zhugs brjod || ston pa rang gis lung
 bstan te ||
 de 'dir dbang gi cho ga'o ||

試訳「水灌頂が1番目であり、宝冠灌頂において2番目がある。
 金剛〔杵〕灌頂によって3番目があり、尊主灌頂が4番目である。
 名灌頂が5番目であり、6番目に仏〔智〕灌頂がある。
 7番目は瓶灌頂によってあり、秘密灌頂によって8番目がある。
 般若〔智〕灌頂により9番目がある。真実と金剛の結合によって
 あらゆるものたちに禁戒がある。説示者は自ら授記する。
 これが灌頂儀軌である。」

上記の VP 第15章の偈では9種の灌頂が順番に説かれるが、やはり第四灌頂の語はない。なお、これらの偈は他典籍に引用があるために Skt. を確認することが可能であり、表1にまとめて示した。

表1. ①から⑤は Vajrapāṇi の著作である *Laghutantraṭīkā* (以下 LTT) から、⑥⑦⑧は Abhayākara Gupta の著作である *Vajrāvalī* から抜き出したものである¹²。また、Nāropa の著作である *Sekoddeśaṭīkā* にも VP からの引用を見出せるが、LTT ②から⑤とほぼ同様の形であるためここでは該当箇所を紹介のみに留める¹³。

表 1.

引用先 後期密教系灌頂	Vajrapāṇi 著 LTT より (Claudio Cicuzza 校訂本 ¹⁴ p.129. l.1-14)		Abhayākara Gupta 著 <i>Vajrāvalī</i> より (Masahide Mori 校訂本 ¹⁵ p.476. l.12-21.)	
	VP から引用している 5 偈		VP から引用している 3 偈 (田中氏による第四灌頂の根拠) ¹⁶	
a. 瓶灌頂 (kalaśa-)	①	prathamam kalaśābhiṣekam ^a . dviṭīyaṃ guhyam ^b . iṣyate / prajñājñānam ^c . tṛtīyaṃ tu yathā tanuḥ ¹⁷ tathāgataḥ //		
b. 秘密灌頂 (guhya-)	②	prathamam toyasekena ⁽¹⁾ dviṭīyaṃ maulisekataḥ ⁽²⁾ / tṛtīyaṃ paṭṭasekena ⁽³⁾ caturtham vajraghaṇṭayoh ⁽⁴⁾ //	⑥	prathamam toyasekena ⁽¹⁾ dviṭīyaṃ maulisekataḥ ⁽²⁾ / tṛtīyaṃ vajrasekena ⁽³⁾ svādhipatyān ⁽⁴⁾ caturthakam //
c. 般若[智]灌頂 (prajñā [jñāna]-)	③	pañcamam svādhipenaiva ⁽⁵⁾ nāmasekam ⁽⁶⁾ tu śaṣṭhamam / buddhājñā ⁽⁷⁾ saptamam sekam kalaśam ⁽⁸⁾ a. sekam aṣṭamam //	⑦	pañcamam secayen nāmnā ⁽⁵⁾ śaṣṭham saṃbuddham ⁽⁶⁾ eva ca / kalaśasekam ⁽⁷⁾ a. tu saptamam aṣṭamam guhyasekena ⁽⁸⁾ b. //
d. 第四灌頂 (Caturtha-)	④	navamam guhyasekena ⁽⁹⁾ b. daśamam prajñābhiṣekataḥ ⁽¹⁰⁾ c. / tattvavajraprayogeṇa sarvān vajravratān dadet //	⑧	navamam prajñābhiṣekataḥ ⁽⁹⁾ c. tattvavajraprayogeṇa sarvān vajravratam dadet / vyākaroṭi svayam śāstā eṣa sekavidhikramah //
* テキスト中の灌頂名は 全て太字にして示した。 また、下付きの()内の 数字は一連の偈に出てき た灌頂の数を数えたもの である。なお、下付きの a.-d. は上記に対応した タントラ系灌頂である。	⑤	vyākaroṭi svayam śāstā eṣa sekavidhiṃ svayam / ācāryo nāvagantavyaḥ sugatājñānā na laṅghayet //		
	・上記の引用に続く Vajrapāṇi の註釈 evam ekādaśo 'bhiṣekah pradhānam tattvavajraprayogeṇeti bhagavato vispaṣṭavacanāc caturtha d. vaikādaśo va 'bhiṣeko prthag evāvagantavyo vidvadbhir iti /		・上記の引用に続く Abhayākara の註釈 atra mālaśekasyodakādīkāraṇatvena mantrādīnām tu yathāyogam ācāryasekasya caturthasekasya d. kādaśid anyasya ca parikaratveṇa tantrāntaroktitaḥ pratipattavyatvād anabhidhānam /	

ちなみに、VP 第15章の偈の Tib. に比較的合うのは *Vajrāvalī* における引用であり、水灌頂、宝冠灌頂、金剛[杵]灌頂、尊主灌頂、名灌頂、仏[智]灌頂、瓶灌頂、秘密灌頂、般若[智]灌頂という計9つの灌頂が同様に説かれている。一方の LTT では、宝冠灌頂の後に *paṭṭaseka*¹⁸ が加えられ、さらに尊主灌頂に含まれていると考えられる鈴灌頂¹⁹ が尊主灌頂から分離し、直前の金剛[杵]灌頂と合わさって *vajraghaṇṭa*- となっている。なお、田中氏は VP に第四灌頂があるという根拠として *Vajrāvalī*

の引用を挙げているが²⁰、LTTの引用に関しては何ら記述をしていない。

さて、このLTTに引用されている偈（表1.①）では瓶・秘密・般若智灌頂の3つが説かれているが、*Guhyasamājatantra*（以下GS）、SU、『二儀軌』の類似した偈²¹では般若〔智〕灌頂の直後に第四灌頂の語が見られる。以下にそれらを列挙する。

GSより（XVIII. 113）

abhiṣekaṃ tridhā bhedaṃ asmin tatnre prakalpitaṃ /
kalaśābhiṣekaṃ^a. prathamam dvitīyaṃ **guhyasekataḥ**^b. /
prajñājñānaṃ^c. tṛtīyaṃ vai **caturthaṃ**^d. tat punas tathā //

SUより（II. i. 46-47）

prathamam **kalaśābhiṣekaṃ** dvitīyaṃ **guhyābhiṣekataḥ** /
prajñājñānaṃ tṛtīyaṃ tu **caturthaṃ** tat tathā punaḥ //

『二儀軌』より（II. iii. 10）

ācāryaguhyaprajñā ca **caturthaṃ** tat punas tathā /
 ānandāḥ kramaśo jñeyās catuḥsecanasamkhyayā //

上記の通り、第四灌頂が説かれる場合において、瓶（または阿闍梨）・秘密・般若智・第四灌頂は1つのセットとして現れ、般若〔智〕灌頂の直後に第四灌頂が説かれている²²。しかし、①に説かれるのは瓶・秘密・般若〔智〕灌頂のみで、第四灌頂が説かれていないのは明確である。次に、②③④で説かれている灌頂は十種であるが、最後の十番目は般若〔智〕灌頂である。また、上記の田中氏が第四灌頂の根拠として示した⑥⑦⑧で説かれている灌頂は、そもそも田中氏の言う十種ではなく、九種しかない。十番目はVPからの引用で序数を用いられておらず、註釈者による解釈であるため、VPの灌頂に含むのは不適當であり、本文の引用における最後の九番目に説かれているものは同じく般若〔智〕灌頂である²³。したがって、⑥⑦⑧は「VPにおいて既に第四灌頂が説かれていた根拠」とするには不十分な箇所といえる。

ちなみに、VPにおいて、般若〔智〕灌頂に続く文は金剛禁戒、授記といった儀礼²⁴であり、LTT、*Vajrāvalī*は註釈文において共にそれらの儀礼対して第四灌頂という名称を使用している。特にLTTにおいては

tattvavajraprayoga- という用語に第四灌頂という註釈を加えているが、この用語はこの箇所他に用例を見出せない。むしろ、他に見出せない用語に対して「第四灌頂として知られている」と註釈を加えたことは、この偈に第四灌頂の記述がないことを浮き彫りにするものである。②③④は灌頂の名称と次第について、序数を用いて述べた偈である。その偈の中で序数を用いて説明されておらず、しかも金剛禁戒という儀礼にかかる用語がどうして第四灌頂であろうか。本来、この偈の中には第四灌頂は想定されていない可能性が高いといえる。

ところで、島田氏が述べるように VP および VP の諸註釈書のどこにおいても第四灌頂が説かれていないかと言えばそうではない。島田氏の扱っていない VPT では以下のような第四灌頂に関する記述がある。

VPT 6a5 (VP 第七章の偈に対する註)

(paramaṃ maṇḍalaṃ likhyeti, ācāryaseka sūcanaṃ.
 samayaretavidhāneneti, guhyābhiṣekasya sūcanaṃ.
 homaṃ vā dhyānaṃ kṛtveti, prajñābhiṣekasya.)
 āśvāsan tu tadā śrjed iti, caturthasya.

試訳「またその時、彼（師）は〔弟子に対して〕蘇息（āśvāsa-）を与えるべし、とは第四〔灌頂〕に関する〔記述である〕」

以上のように VPT には第四灌頂についての記述がある。しかし、蘇息（āśvāsa-）を与えることが第四灌頂であるという解釈には違和感がある。灌頂儀礼の場面で説かれる蘇息とは、灌頂が授けられた弟子に対して師から激励を与えるという儀礼であり、一般的には阿闍梨灌頂に含まれる儀礼である²⁵。その内容は、正しく灌頂が授けられたという保証、裏切りを許さないという戒め、今後なすべき事業の指示等といったことが挙げられる。この蘇息は第四灌頂の中に含まれる一儀礼であるという可能性も捨てきれないが、そもそも灌頂行為そのものではない蘇息儀礼に対して第四灌頂と註釈すること自体が不可解である。なお、VP ではこの偈の直後に Pañcaḍāka 曼荼羅の観想が説かれている。このように蘇息儀礼の最後に曼荼羅の観想法を説くものは Vāgīśvarakīrti の著作である *Samkṣiptābhiṣekavidhi* でも見られており²⁶、蘇息の授与に続く曼荼羅の観想は一般

的な儀礼の流れといえる。

したがって、VP の記述は第四灌頂ではなく蘇息儀礼と判断した方が自然であり、VPT は蘇息儀礼に対して第四灌頂と註釈した可能性が高い²⁷。

3. 結論

以上のように、他タントラと比べる限りにおいて、VP 本文に第四灌頂という語を見出すことはできない。今回の研究結果のみによって VP に第四灌頂がないと述べることは早計であるが、VP に第四灌頂があるとする田中氏の先行研究の根拠には何らかの誤解があったと考えられる。なお、現在確認できる註釈書の中で唯一、VPT においては第四灌頂の語が確認できた。しかし、他文献との比較によって、その註釈は不自然であることが分かった。このような註釈がなされた理由には、「普及していた第四灌頂を VP の解釈に組み込む必要があった」こと等が推測できる。したがって、VPP と VPT の両註釈書の成立に関して、第四灌頂の語がない VPP は、第四灌頂の語がある VPT よりも遡る可能性がある。一方で、VPP と VPT が異なる相承を基にしていたために解釈が異なっていたという可能性もある。

ところで、前述の『二儀軌』の九尊曼荼羅を再度組み立てて VP の Pañcaḍāka 曼荼羅が成立したという田中氏の見解は、曼荼羅の構成という視点に立った場合、やはり最も合理的な説といえる。しかし、灌頂という視点に立った場合、般若智灌頂の後に第四灌頂の語がない VP は、第四灌頂という語がある『二儀軌』よりも成立年代は遡ると見た方が合理的ともいえる。VP と他タントラの先後関係を推定するためには、まだ VP の研究が不十分であり、今後さらなる研究が必要不可欠であろう。今回は VP 文献の灌頂を中心に扱ったが、VP には重要な役割を持つであろう儀礼が他にも多く説かれており、註釈書以外でも他文献との比較によって今後多くのことが解明できると考えられる。今回とはまた異なる視点に立った場合には、はたしてどのような結論が導き出されるのか、さらに多角的な研究を重ねて VP の解明に励みたい。

- ¹ このタントラについては主に大正大学の野口圭也氏によって研究が進められている。
野口圭也 1984 「*Saṃputodbhavatantra* の基本的性格」『印度學佛教學研究』第三十二卷二号 pp.168-169. など.
- ² この VPT は著者不明である。なお、この註釈書を写本の読み通りに ṭippati とするか、ṭippanī に校訂するかは研究者の間でも統一がとれていない。そこで、本稿では ṭippati という写本の読みを尊重して使用する。なお、ṭippati という単語を使用している典籍は他に少なくとも数例あることが倉西憲一氏によって指摘されている。
Kuranishi Ken'ichi 2012 'On the Manuscript NAK 3/716 (NGMPP A48/11): The Sadāmnāyānusāriṇī, a Commentary on the Saṃvarodayatantra' *Journal of Indian and Buddhist Studies* Vol. 60, No.3. p.1274 註7.
- ³ VPP の Skt. 写本は不完全ながら現存している。しかし、複数の異なる写本の中に紛れ込むような形で散乱しており、状態の悪い葉も多い。Cf. 田中公明1998 「ネパールのサンスクリット語仏教文献研究—第41回学術大会における発表以後同定された断片について—」『印度學佛教學研究』第四十六卷二号 pp.148-152.
- ⁴ VP の註釈書は VPT の他にも Indrabodhi 著の *Pañjikā* (デルゲ版 No.1194, 北京版 No.2324), Kṛṣṇa 著の *Mukhabandha* (デルゲ版 No.1195, 北京版 No.2325) が知られている。
- ⁵ 田中公明 2010 『インドにおける曼荼羅の成立と発展』(春秋社) p.346, l.12-16.
- ⁶ 灌頂について、近年では Harunaga 氏の詳しい研究がある。Harunaga Isaacson 2010 'Observations on the Development of the Ritual of Initiation (abhiṣeka) in the Higher Buddhist Tantric Systems' *Hindu and Buddhist Initiations in India and Nepal* (Harrassowitz Verlag Wiesbaden) pp.261-279.
- ⁷ 津田真一 2008 『反密教学』(春秋社) p.203. l.2.
- ⁸ 島田茂樹 1983 「Vajrapaṇjara と Hevajra」『印度學佛教學研究』第三十二卷一号 pp.188-189. 同著1985 「ヘーヴァジェラ曼荼羅の構成 —その成立と展開—」『密教図像』第3号 pp.72-81. なお、島田氏はこの時点では VPT を知らなかったためか、VPT を取り扱っていない。
- ⁹ 田中公明 2010 『インドにおける曼荼羅の成立と発展』(春秋社) p.352.
- ¹⁰ 田中公明 1994 『超密教 時輪タントラ』(東方出版) p.130.
- ¹¹ なお、この偈は VPP でも引用が見られる。(デルゲ版66b4-5, 北京版76b5-6).
- ¹² *Vajrāvalī* において、*Vajrāvalī* 本文で挙げている灌頂と VP から引用してきた灌頂では次第および名称が少し異なる形をとっており、整合性に欠ける。そのため Abhayākara Gupta はいくつかの説明を加えている。この点に関しては森氏の詳しい研究がある。森雅秀 「アバヤーカラグプタの灌頂論」『印度學佛教學研究』第四十一卷二号 pp.(238)-(239).
- ¹³ Francesco Sfera 2006 *The Sekoddeśaṭīkā by Nāropā (Paramārthasaṃgraha)* (SERIE ORIENTALE ROMA XCIX) p.105. l.3-10.

- ¹⁴ Claudio Cicuzza 2001 *The Laghutantraṭīkā by Vajrapāṇi A critical edition of the Sanskrit text* (SERIE ORIENTALE ROMA LXXXVI).
- ¹⁵ Masahide Mori 2009 *Vajrāvalī of Abhayākara Gupta* (Buddhica BRITANNICA SERIES CONTINUA XI) vol.1-2.
- ¹⁶ 田中氏は *Vajrāvalī* について桜井氏による校訂を例として挙げている。しかし、ここでは桜井氏の校訂テキストよりも近年に刊行され、*Vajrāvalī* 全体を網羅している森氏の校訂テキストを用いた。なお、該当箇所における両者の校訂に内容差はない。
- ¹⁷ tanuḥ]] em.; tanu MsB; tan na Cicuzza 校訂本 (前掲 Claudio Cicuzza 2001) p.129. l.2.
- ¹⁸ ここでの *paṭṭaseka-* という灌頂儀礼の内容は不明であるが、『初会金剛頂経』 § 42 において *paṭṭābhīṣeka-* という儀礼が出てくる。桜井氏によれば、*paṭṭābhīṣeka-* は、阿闍梨から弟子にバタを受ける儀礼である他に阿闍梨が弟子の宝冠から垂れ下がる飾り紐を結んであげる儀礼である可能性を指摘している。Cf. 桜井宗信 1996『インド密教儀礼研究 一後期インド密教の灌頂次第一』(法蔵館) p.95. l.3-9.
- ¹⁹ いわゆる五種灌頂体系において、鈴灌頂は尊主灌頂の中に含まれているものと考えられる。略説すれば、金剛杵灌頂において右手に金剛杵が与えられた後、左手に鈴を与えて本尊の真言を唱え聴かせるまでが尊主灌頂である。また、尊主灌頂は鈴灌頂の別称とされ、同一の内容を指すものである。おそらく、これは鈴を与えることと本尊の真言を唱え聴かせることのどちらに重点を置いたかによるものであろう。Cf. 桜井宗信 1996『インド密教儀礼研究 一後期インド密教の灌頂次第一』(法蔵館) p.100.
- ²⁰ 田中公明 1994『超密教 時輪タントラ』(東方出版) p.144脚注(9)。なお、ここで田中氏が挙げている桜井氏の校訂テキストは、後に改めて出版されている。桜井宗信 1996『インド密教儀礼研究 一後期インド密教の灌頂次第一』(法蔵館) p.478.
- ²¹ Cf. 前掲 Masahide Mori 2009 *Vajrāvalī of Abhayākara Gupta* p.477. l.1-11.
- ²² ただし、*tat punas tathā* の解釈については学者間においても様々な解釈がなされている。(e.g. 山口瑞鳳 2004『東洋叢書 4 チベット (下) 改訂版』(東京大学出版会) p.238-239.) 例えば GS において、灌頂は3つであると説かれており、第四灌頂は第三灌頂までの中に含まれていると解釈することも可能である。この *caturtha-* という語があるからそのタントラに第四灌頂がある、とはすぐに言えないようである。ただし、いずれの場合でも、般若[智]灌頂の直後に第四灌頂があることは明確である。前述のように、VP では般若[智]灌頂が説かれているにも関わらず、第四灌頂の語はない。
- ²³ なお、田中氏の扱っていない *LTT* では十種灌頂として引用され、10番目が般若[智]灌頂である。第四灌頂は *Vajrāvalī* と同様に註釈者による解釈として加えられており、11番目とされている。
- ²⁴ 例えば、*Samkṣiptābhīṣekavidhi* では金剛禁戒と授記の直後に後述の蘇息がある。なお、金剛禁戒とは菩提心を堅守すべきことを「金剛杵の授与」という象徴的作法で

教戒するものと述べられている。前掲桜井 1996『インド密教儀礼研究』pp.164-166.

²⁵ Cf. Ryugen Tanemura 2004 *Kuladatta's Kriyāsaṃgrahapañjikā* (Groningen Oriental Studies XIX) pp.36-37.

²⁶ 前掲桜井 1996『インド密教儀礼研究』pp.166-169.

²⁷ タントラ文献において、このような強引な註釈はしばしば見られるようである。Cf. Alexis Sanderson 2009 "The Śaiva Age: The Rise and Dominance of Śaivism During the Early Medieval Period." In: Shingo Einoo (ed.), *Genesis and Development of Tantrism*. Tokyo: University of Tokyo, pp.168-169.

